

風の末裔シリーズ・2ndシーズンの4

～ 迷子 ノスリ ～



ノスリは、最近のカワセミの変わりのように、ちょっと驚いている。

相変わらず身なりに無頓着だが、以前みたいに『目を覆いたくなる惨状』ではなくなった。少なくとも靴は履き、着る物も定期的に取り替える。さんばら髪や寝癖が夕方までそのままって事もなくなった。

手足と首に巻き付く石の鎖は相変わらずだが、これは仕方がない。石の一つ一つに意味があり、彼に言わせると、どれか一つが欠けても、護符としてのバランスが崩れるらしい。

まあ、以前のような、とよんとしたオーラが消えて、道行く子供が逃げ出す…という事はなくなった。

「オナノコ一つでここまで変わるかねえ…」

ずっと彼の世話を焼いて来たノスリにしたらちょっと複雑だが、魔力至上主義だった相棒が、人並みの感情を持ち合わせるようになったのは、ほっと一安心出来る事だ。

その朝も、三人並んで長の執務室を後にしながら、ノスリはカワセミに声をかけた。

「また三人、別々の任務だな。大丈夫か？」

「うん、長はちゃんとボクに合った仕事を、割り振ってくれる

から」

以前なら一人を嫌がってうじうじ駄々をこねて周りを困らせたものだが。反対隣を歩くツバクロだって、目を丸くして、音の出ない口笛を吹いた。

馬繋ぎ場に到着し、カワセミはカラ馬を一頭連れて、いそいそとひと足先に飛び立った。湖の巫女を拾いに行くのだ。

「ホント、分かりやすい奴…。にしても、あいつが駄々をこねないだけで、こんなに平和なんて、…新発見だな」

ツバクロが、あつという間に遠ざかる馬影を眺めて、もう一度口笛を吹いた。

「君はちょっと物足りないかい？」

「バカ言え…」

ノスリも馬影を見送ってから、自分の馬の準備を始めた。

カワセミが一週間生死の境をさまようような羽目に遭って以来、長は、彼の仕事になるべく巫女を同道させよう指示していた。

理由付けは巫女の勉強だが、皆の感覚はカワセミがオーバートした時の『保険』だ。

この巫女殿、成りは小柄だが、なかなかタフで力持ちだ。草原育ちだけあって、一通りの生き抜く知恵は身に付けているし、

何より馬に乗るのが素晴らしく上手い。蒼の里において、例外中の例外…、人間なのに、草の馬を宛がわれている。

草の馬にも、主持たすの予備の馬がいて、馬事係が常に何頭か余分に調教して育てている。子供には新たに生まれた新馬が宛がわれるが、大人が自分の馬に早世された場合、予備の馬から新たに選ぶ。新たな馬は前の馬の鈴を受け継ぎ、前の馬の積み重ねた資質をちょっとだけ継承する。

風の末裔の一族に、草の馬は切り離せない存在で、その馬を人間に貸すなんて、以前なら考えられない事だった。

「二人乗りなんてトンデモない！ オンナノコがそんなに身体に密着したら、術が逃げる！」

カワセミの一声だった。まあ、カワセミの馬も主に似て小ぶりて痩せ気味なので、二人乗りも馬車引きも可哀想だった。

ノスリもツバクロも、あえて膝枕の事は突っ込まなかった。キヒタキを見ているので、人間が草の馬に乗るのにあまり抵抗なかったし、この巫女殿は、気難しい草の馬と、あつという間に仲良くなった。

里の古い大人も、渋りつつも大きく反対はしなかった。カワ

セミに、もしもの事があつたら困るのだ。

蒼の長の弟子は数いるけれど、長の術をマトモに継承出来たのは彼だけだった。その彼は、風が吹けば飛んでく程脆弱なのに、ペース配分が出来ない。

オマケに人見知りか激しい。蒼の里で生まれ育つたというのに、会話した事のある者はごく僅かだ。

かと言って、ノスリにいつまでもカワセミのお守りはさせておけない。彼だって重要な跡取りなのだ。これからどんな能力を伸ばさねばならない。

だから巫女の出現は、まじう事なく良い事の筈だ。外の者で、あのカワセミがあんなにナツク…もとい、心を許す者が現れるなんて、誰も思わなかった。そんな訳で、人間に対する掟も、巫女に関しては、ある程度黙認された。

一部、頭が一方通行な者は、あらぬ心配をした。すなわち、カワセミが人間の娘に懸想けそうにして、役割を疎(おろそか)にしてしまつのではと。あの二人を知っている者には、笑い飛ばせる戯言(ざれごと)だ。二人ともどれだけ長を大切に想っているか…。

「それに、予知能力のあるカワセミが、将来的に里の行く末に

影を落とす者に、惹かれる訳がありません」

ツバクロの、彼らしい屁理屈が、大人達を説き伏せた。

もっとも二人の見る限り、カワセも巫女殿もまごっこしい程生真面目で、ちっとも面白く……もとい、要らぬ心配には及ばなかった。

そういう訳で、最近すっかり世話係から解放されたノスリが、残ったツバクロと馬繫ぎ場で、二三言話していると、小柄な女の子がツツツと寄りて来た。

「ツバクロ〜」

「フィィ〜」

頭の両側をお団子に結ってオレンジ色の毛糸で束ねたイタズラっぽい目の女の子は、ツバクロの五つ年下の従妹だ。今もそつだが、他の女の子達が遠巻きに見ている一人に近付けろのを、ちよっとハナにかけている所がある。

「ねええ〜、この間の『借り』、早く返してよね〜」

小娘は後ろ手を組んで、背の高い従兄弟に背伸びして迫った。

「ああ、あれね……、もうちよっと待ってて。今日はこれから忙しいんだ」

『借り』とは、彼女の一張羅のよそ行きの服を借りて、かき

裂きだらけのボロボロにしてしまった事だ。

「こら、ツバクロは長の任務で出掛ける所だ。つまらない事で絡むな」

ノスリが大人らしく叱る。彼にだって、勝手知ったる妹みたいな存在だ。

「つまらなくないわー！」

フィィは両手を広げて、顔をくしゃっと歪めた。

「あれは！ あれはね……！」

「分かった分かった……、取っておきのとっときの時の為に、一度も袖を通さずに大事に仕舞っておいたのを、無神経な従兄弟が勝手に持ち出して、台無しにしちまったんだよなっ」

ツバクロは、もう何十回も聞かされた文句を、繰り返した。

「埋め合わせは必ずするから、今は勘弁して」

「じゃあ、利息ちょうだい」

「はあ……」

「行ってきますのキスー！」

イタズラっぽい顔をした小娘は、また背伸びして、従兄弟に迫った。その額を指でピンと弾いて、「はいはい、行ってきますっ」と返すツバクロも、こういう悪ふざけは慣れっこだ。

「ふふん、冗談よ。はいこれ」



フィフィはやっと本来の目的…、従兄弟に小さな包みを手渡した。

「なに?」

「揚げ団子。ツバクロ、好きでしょ? お仕事頑張ってるね」

「ああ…、うん、ありがと」

「ついでだから、ノスリにもあげるわ」

フィフィは勿体ぶって、もう一つ包みを取り出した。

「ついでかよ…」

「嫌ならあげない!」

「いいえ! 謹んでおし頂きますよ、へいへい!」

「カワセミにもあげれば良かったのに」

「カワセミ?」 冗談?!

ツバクロは地雷を踏んだ事に気付き、口をつぐんだ。

あの日、ヨレヨレのボロボロで帰還したカワセミが彼女の一張羅を着ているのを見て、彼女の上げた悲鳴は、決してカワセミを心配しての物ではなかった。それ以来、気の毒なカワセミは、彼女に目の敵にされているのだ。

この先彼女に付き合つと、長くなる事必至なので、二人は目配せをして馬を発進させた。

「じゃあね、フィフィ、団子、サンキュ」

「キッスが欲しけりや、早く大きくなりな！ 特に胸と尻！」  
下で何か叫ぶフィフィの声はもう届かない。二人は笑いなが  
ら上昇し、途中まで一緒に飛んだ。

「来週には時間が出来る。王都へ行って来ようと思うんだ」  
「へえ？」

「実は、蒼の狼殿にお願いしてあるんだ。大陸産の絹を一反、  
分けて貰えるよう」

「ほお、まあ、彼処(あそこ)にはそんな品、」  
「口口口口していそ  
うだからな。しかしお前、ホントにそういうの、ソツないな」  
「っていつか、喜んで欲しいじゃん。一番年の近い従妹だし…」  
そんな事を話しながら、各々の持ち場に別れた。

その日のノスリの任務は、棘の森の偵察だった。

一見穏やかそうな任務だが、穏やかならぬモノが憑きつつあ  
る…との報告で、ノスリに割り振られたのだ。ノスリの剣には  
長が術を込めてある。

噂の主はすべ見つかつた。鼻の頭に大きな棘のあるイノシシ  
だ。特別に悪いモノではない。自分がどうすべきか、知らない  
だけだ。ただのイノシシが、長生きする程に力を持って、途方  
にくれるまま乱暴を働く。

初っぱな、ちょっと戦闘になったが、剣の術を使う事なく、  
ねじ伏せる事が出来た。ノスリには、大地の精気を力として使  
う能力がある。己の骨と筋力以上の物理的力を使える。

そして、拳を交えた相手と心を通わせるのは、他の誰も真似  
出来ない…実は長さえ一目置いて、彼だけのスナイタスだ。

猪は、とくとくと説得されて、森の流れの一員となる事を納  
得してくれた。

後は長の管轄だ。もしかしたら、もうカワセミにやらせるか  
もしれない。ひと昔前は、こんな前振りから、あれもこれも長  
一人でやっていたのだ。そりゃ大変だった筈だ。

自分達が長を助けられるようになって、本当に良かった。自  
分も、もっともっと、やれる事を広げなくては。

\*\*\*

棘の森を後にして、ノスリは谷あいの『品の字右』の上に、  
馬を降ろした。ここでツバク口と待ち合わせをしている。

二人とも里では目立つ存在だし、皆に一目置かれている。気  
を抜いてバカ話して、昔みたいにぶざけ合えるのは、こういう  
所だけだ。カワセミみたいに、誰がどう見ていようとどこ吹  
く風なのが、たまには羨ましい。

しばらく待ったが、ツバク口は来ない。今日はたいした任務

じゃなかった筈だ。

確か、山の民との定期連絡と、山の見回りの…。

いぶかりながら里へ戻ると、やはりツバクロは帰っていないかった。

「・・・奴に限って…」

打ち消したかった不安がよぎる。

上空で鈴の音がした。

二騎の馬影が、里の上空で制止している。ノスリは今一度馬に跨がって、上昇した。

馬影は湖の巫女とカワセミだった。巫女は、律儀に、蒼の里に入らない。長も特に禁じてはいないのだが、彼女の中でしっかりケジメを着けている。

カワセミは馬の上でぐったり伸びていて、巫女がカワセミの馬の手綱を握って引いていた。ノスリは慌てて馬を横付けして、半分もろうとうとしているカワセミを引き取った。

「今日のお仕事で力を使い尽くされたのに、どうしてますます蒼の里に戻る、とおっしゃって…」

「……苦労…」

ノスリはカワセミを覗き見た。やせっぽちの青年は白い顔を

して、目の焦点も定まらないまま、ノスリの腕を掴んだ。

「ノスリィー！ 長の所へ連れてって！ 早く、はやく…！」

「どっした?!」

「変なビジョンを見たんだ！ ツバクロは？ 里にいる?!」

「……まだ…戻らん…」

「…!! 早く、長の所に…!!」

ノスリは気絶しそうなカワセミを抱きかかえ、巫女を振り向いた。巫女は、自分の事は一切構わず結構、という目をして頷うなずいた。

「御免…！」

ノスリはカワセミの馬も連れて、急降下した。

馬繋ぎ場でなく、長の執務室前に直接降りる。長は既に屋外に出て来ていた。

「ノスリ！ カワセミー！」

「長ア・・・」

カワセミは長の胸に倒れ込み、片手を握った。

「……………!!!」

自分の予知したビジョンを、長に伝えているらしい。伝え終わると、ぐったりと気を失ってしまった。

長の顔を緊張が覆う。

「この子の中へ！」

集まって来た兵士にカワセミを預け、長はノスリに向き直った。

「ツバクロが山で危険な状態です。私が行きますから、貴方は待機して下さう」

「…ツバクロが?! お、俺も行きますー！」

「兵士を出すようになるかもしれませんが。指揮をする者が必要です。貴方をお願いします」

「えっ? そっ…俺がっ?!」

「追って鷹を飛ばします。とにかく待機して下さい。今は私の『眼』が必要です」

馬繋ぎ場から鷹と共に鬪牙の馬が一足飛びに到着し、長は跨がるが早いか、一瞬で見えなくなった。

ヒトが集まる。皆、不安そうだ。

「ノスリーー！」

ヒト垣からフィフィが飛び出して来た。

「何?! どうしたの?! ツバクロ、どうかしたの?!」

甲高い声を上げて、ノスリの両腕を掴む。彼女の声が、皆の不安を煽る。これじゃ、ダメだ…！

「フィフィ…」

腰を屈めて、真っ赤な顔をしている娘に、小声で言った。

「ツバクロは大丈夫だ。あいつは強い。知っているだろう? 落ち着け、お前が騒ぐと不安が広がる。不安は良くないモノを招く」

「……ん・・・」

フィフィは、唇をぎゅっと噛み締めた。

ノスリは顔を上げた。

「長の留守は俺が預かる。兵士は馬装して待機。篝火を目一杯増やして松明の用意。救護所は湯を沸かして万全の体勢を」

皆、それぞれの持ち場に散った。馬事係は二頭の馬を引いて行く。

ノスリは、フィフィを伴って執務室に入った。カワセミが長椅子に寝かされている。

「フィフィ、手当てあげて」

「えっ?! 私があっ?!」

「ツバクロの急を知らせてくれたんだ。ツバクロを大事に思っているのは、お前だけじゃないんだぞ」

「……………」

娘はぐっと黙って、大人しく桶に水を汲み、手拭いを絞って

病人の額を冷やし始めた。

「カワセミ…どうだ、話せるか？」

「ふにゃあ…長は？」

「行かれたよ。お前、何を見たんだ？」

「ツバクロが、山で何かに襲われるんだ。爪の大きいモノが大勢で、寄ってたかって…。それから、岩が一杯落ちて来て、大落石になって…」

横にいるフィフィが凍り付く。

「ボク、岩を何個か弾いたんだけど、ふっと見えなくなってる…。」

ノスリ、どうしてここにいるの？」

「待機だ。長の代わりが必要だから…」

カワセミは額の布を滑らせて起き上がった。

「行こうよ。ボク、ツバクロを探せる。こうして動ける間はまだ、力、使える…よ…」

しかしそのままグニヤリとうつつ伏せてしまった。

「あああ…ボクって…もう…。」

ノスリは立ち上がって、相棒をヒシリと指差した。

「カワセミ、長の代理としての命令だ！ お前も待機だ。出番が来るまで、一秒でも長く休んでろ。余分な体力使うな！」

カワセミは仰向けに戻って、ちょっと潤んだ目でノスリを見

ながら、呟いた。

「……了解…」

「鷹です！」

兵士の声で外に飛び出す。

夜目の効く特別な鷹は、一直線にノスリの腕に降りた。

《ツバクロは無事です。兵士が必要。一小隊率いて、鷹に道案内させて来るように》

手紙ではなく、鷹が直接、長の口伝えを喋った。余裕のない状態って事だ。

「一個小隊、準備！」

叫んでから執務室に戻る。

「カワセミ、後を頼む」

「へ…？ ボクも行く…。」

「良く考えろ、真剣に！ 俺達、共倒れちゃあダメなんだ。もし万が一、俺ら三人と…長に何かあったら、里はどうなる?! お前一人は残らにやダメだ！」

「ノ…ノスリィ…」

「しっかりしろ！ 俺はお前を、尊敬しているぞ！」

ノスリは馬繫ぎ場へ走り、一小隊伴って、鷹の後を追った。

目指す山が近づく。

不意に、中腹で翡翠色の光が広がった。光に追われて、何匹かの黒い大きな影が飛び上がって来る。蝙蝠(こつもり)みたいな翼を持つ、巨大な黒蜥蜴(くろも)くるとかげ…！ 鋭い大きな爪を持つ彼等を、上空で迎え撃つ形になった。

蜥蜴を蹴散らしながら、ノスリは地上を素早く捜した。さつき光った所に、見知ったシルエツトが見える。背中合わせて剣を構えた、長とツバクロ！

上空の蜥蜴どもは兵に任せて、一直線にそこを目指した。ツバクロは片膝地面に着けて身体が傾き、背中で苦しそうな呼吸をしている。酷い状況なのは分かったが、とにかく生きている彼を見て、喉から心臓が飛び出る程嬉しかった。

「長！ ツバクロー！」

落ち着け、ただ飛び込むだけじゃダメだ。ノスリは馬を飛ばしながら、地上をしっかりと見た。蜥蜴の残ったのが三匹…五匹…、逃げる素振りはなく、弱ったツバクロに狙いを絞っている。

「——セイツ!!」

両手に二刀を抜いて、ツバクロに一番近い二匹の真上から飛び降りた。真上って無防備だ。蜥蜴は簡単に斬り捨てられた。

返す刀で二匹…！ ラスト、真正面から一匹…！ ノスリの剣は、守る者がいる事によって、何倍にも強さを増す。

「長！ これでしまいですか?!」

「はい…、おおむね倒したようです」

長は剣を収めながら 後ろのツバクロを振り向いた。ツバクロは傷だらけで両膝地面に落としていたが、顔を上げて安堵の色を浮かべた。

「よく頑張りました。ノスリ、ツバクロを頼みます」

「はい、長は…?」

「山の民の所に話に行かねばなりません。心配ありませんよ」

「あ…」

二人は瞬時に悟った。この蜥蜴に襲われたのって、『たまたま』じゃないんだ…。

「あの、長…」

『連れて行って下さい。』

二人、同時に声を発した。蒼の長はゆっくり振り向いて、目を細めて頷いた。

「そうですか…、ではおいでなさい。ツバクロ、ちゃんと立てますか?」



「大丈夫です」

青年はよろけながらも、頑張って背筋を伸ばした。長は鷹を飛ばして、一個小隊を上空で待機させた。

蒼の里だって、完全に平和じゃない。草原を我が物にしたいモノや、外からの侵入者だって来る。だから武装は必要不可欠だ。二人は、頭で分かってはいたが、リアルに感じたのは初めてだった。

長は、あえて弟子達をそういうのから遠ざけていた。でも、そろそろ、教えなければならぬだろう。…そういう事だって起こるって事を…。

今回は、普段懇意にしていた筈の山の民が、『南方から来た流れ者の一団』に上手く言い含められて、この地方を治める蒼の一族の大切な継承者が来る、という事を、つい漏らしてしまっただ。

そういう事で山の民との関係を切つてはいけない。

長は山の民達に、とつとつと説得する。力が強いだけの流れ者に一時的に従って、自分達の子々孫々がどうなるか…。

本当に……このピンチを、継げるのだろうか…？

二人は緊張で身体を固くしながら、蒼の長の責任というものに、改めて唾を呑み込んだ。…長は、うんと子供の頃、…たった一人で、こんな気持ちだったんだ…。

\*\*\*

一小隊を伴って、里が見える所へ帰り着いた頃には、もう夜半だった。長は張りつめた面持ちだ。ツバク口を危険に晒してしまった事に、責任を感じているんだろう。

「あれ位、軽くあしらえなきゃ、何時まで経っても長頼みだ」  
ノスリと並んで飛びながら、ツバク口が下唇を噛んだ。

「大蜥蜴百匹をか？ お前、頑張ったよ。落石にもやられたんだろ？」

「石は落とされたけれど、当たらなかった。何だか変な感じに飛んでいったんだ」

「…カワセミが、自分で幾つか弾いたって言っていたな」  
「カワセミが？」

「そもそもお前のピンチを透視して知らせたのもカワセミだ」

「透視？ それで遠くから岩も弾いたって？ 凄いな、あいつ」

「長も、そんな事、出来るか分からないって言ってた」

「カワセミ…、あれで身体が丈夫なら、完璧な長じゃん」

「だから丈夫な身体をくれなかったんだろうよ、神サマは」

「……………」

「あれで身体も問題なかったら、俺ら、もっとあいつに頼ってた。あいつ一人、大変な思いをする羽目になっていた」

「……そうだな……」

「丁度いいんじゃないか？ あの能力に、あの病弱さ加減、…それに……」

「あの性格！」

二人は同時に言って、顔を見合わせて笑った。

蒼の長は、後ろで仲良みそうに笑い合う二人の弟子の声を聞いて、心が解ほぐれる思いだった。

今回は自分の油断だ。危つく大切な宝を失う所だったと考えたと、肝が冷える。以後、注意に注意を重ねなければ…。

蒼の一族を率いる、という事の負の部分、いつかは教えねばと思っていた。こんな形で見せる事になったが、二人はしっかり受け止めてくれた。

「いつまでも子供じゃないんですね……」

「あー！」

ノスリが大声を上げた。里の外の草原の、少し小高くなっている丘に、草の馬と湖の巫女殿が立っていた。

「まさか、昨日の夕方からずっと、あそこに……」

もう目をまたいで夜明けの方が近い。長とツバクロもびっくりしてそちらを見ている。

「俺、ちょっと行って来ます」

ノスリは隊列を離れて、こちらを見上げている巫女の所へ飛んだ。巫女は、隊列の中にツバクロを見止めたのだろう。ノスリを見てにっこり微笑んだ。

「あんだ、ずっとここに居たんか？ 帰ってもよかったのに……」  
黒髪の娘はノスリをマジマジと見つめ、微笑みながら首を横に振った。

「心配しちゃいけませんか…？ 私は蚊帳の外だけれど、蚊帳の外からでも心配はしています。帰れるものですか…」

「ああ……」

そうだ、この娘は『あの』カワセミと、ずくくと一緒にいられるんだ。脳内時計が違つんだ…。

「ツバクロはもう大丈夫だ。カワセミも」

「そうですね、良かったです…。では帰ります。草の馬はカラ馬で帰します。また、ご用の折は、お声掛け下さい」

巫女はふわりと馬上の人となり、飛び立とうとした。

「あ、ちょっと……」

言っておいた方が良いでしょう。

「ああ・・・、今回ツバクロは、蒼の里の継承者という理由で危険な目に遭った。長はあなたを大切に思っているだろうし、今後あなたに用事を頼むのを控えるかもしれない」

巫女は、ノスリの言う事を最後まできちんと聞いてから、さうらと言った。

「そうでしようか？」

「・・・巫女殿・・・？」

「あの方はそんな事で立ち止まるような方ではありません。もう私もここに居て、一緒に歩き出しているんです。ここで私を遠ざけるくらいなら、最初から肩を並べてはくれないでしよう。危ないからやっぱり止めようなんて意気地なしな事、おっしゃるご苦労があります」

今度はノスリが巫女をマジマジと見つめた。黒目の奥の青みがかかった部分が揺らめいて、それが焰のように感じられた。

「すみません・・・、生意気言ってます」

「いや・・・あなたは長と過ごした時間は殆ど無いと聞いていたが

・・・、驚くほど長の事を解っていて・・・びっくりしてる・・・」

「赤ん坊の頃から一緒だったんです」

「え・・・？」

「私が赤ん坊の頃から・・・。勿論話した事はありませんでした。初めて話せたのは、つい二年ばかり前の数日間。でも、最近、分かったんです。話さずとも、あの方の愛情を一身に受けて育ったんだと・・・私・・・」

「……………」

「例え、血は繋がっていなくとも、あの方は私にとっての『お父さん』なんです。あの方は私の本当を分かってくれた。だから、あの方の力のヒトかけらにでもなれて、今、本当に幸せです」

「……………」

くつきりとした横顔は揺るぎない。何て激しい信念と信頼。長が認める訳だ・・・。自分も今、認めつつある。

巫女は、重ねて、生意気言ってますみません・・・と謝って、馬に跨り手を振りながら、空を速足で駆けて行った。

ノスリは巫女殿の言葉の一つ一つを反芻しながら里へ戻り、長の執務室の御簾をくぐった。

長は椅子に腰掛け、カワセミの額に手を当てていた。

「ツバクロは？」

「救護所です。外傷が多いので、暫く安静です。オタネお婆さん

んが付いています」

「……」

「巫女殿は帰りましたか？」

「ええ、信念の強い女性(ヒト)ですね」

「……ふふ、私の自慢の『血の繋がらない娘』ですよ」

「どういう方なんですか？」

「そうですね、端的に言つと、妹の、親友の、娘…かな？」

「ああ、あの方の親友……なるほど……はあ……」

「あともう一つ、明確な肩書きがありますが、それは本人の口から出て来るまで、待っていてあげて下さいね」

御簾の外に複数のヒトの気配がする。

「長様……」

オタネ婆さんの声だ。

「入って下さい」

オタネ婆さんが、一人の女性を伴って入って来た。ツバクロの親族の一人、…確か、フィフィの母親だ。

「あの…ノスリ殿、フィフィを、ご存知ないでしょうか？」

「…フィフィ？」

「ずっと見えないらしいんじゃない？」

婆さんも、どうして、こう次々と、困った顔だ。長も表情を変える。

「…ええと…確か、カワセミの手当てを頼んで………」

ノスリは一生懸命思い返した。

「カワセミが目を覚まして、ツバクロが山で落石に合った話をしたんだ」

その辺りまでは、フィフィが居たのを覚えている。

「………！」

母親は口を覆った。確かにフィフィの性格なら、その時点で一人で勝手に、ツバクロの元へ飛び出した可能性大だ。

婆さんは額を押さえて首を振った。長が真剣な面持ちで立ち上がる。

「待って下さい、長ー」

ノスリが言った。

「フィフィは大蜥蜴のいた山には行っていないと思います」

「…?!」

「フィフィは、ツバクロが今日何処へ行くか知らなかった。カワセミは山で落石にあったとしか言っていない。それに………」

長がちよっと感嘆に満ちた目でノスリを見ている。

「俺達、今朝、彼女の目の前で、出鱈目であらめな方向に飛んだんだ。一度任務地へフィフィが着いて来ちゃった事があって…。彼女がいる時は用心して、真っ直ぐ飛ばないようにしていた」

フィフィの母親は口に手を当てて申し訳なさそうな顔をする。

「多分、ぜんぜん見当違いの方向へ行っている。万が一蜥蜴のいた山に向かっていたら、あれだけ派手な光で戦闘していたんだから、真っ直ぐそちらに来る筈だし」

「成程…。心配には及ばんと言っ事か?」

オタネ婆さんも肩を下ろしてほっとした表情になった。

「ああ、でも俺、一応捜しに行きます。ひとつ宛てがあるし」

ノスリは身軽く立ち上がった。長だつて百匹近くの蜥蜴を相手にしているし、今元気なのは自分だけだ。

「…木の根元にいるよ……」

皆、振り向いた。

カワセミは仰向けで、目と額を手拭いで覆ったままだ。

「大きなトネリコの根元……」

「寢言のように眩いて、静かな寢息を立て出した。」

「……………」

信用していいだろう。

\*\*\*

ノスリは馬を全力で駆った。巫女はのんびり速足で駆けていた。追い付ける筈だ。しかし、思いもかけず、星空の中で馬を停止させている巫女がいた。

「巫女殿?」

「貴方が凄く早さで迫って来るのが見えたから…。どうなさつたのですか?」

「巫女殿、今晚ずっとあそこに居たろ? 長が飛び立った後、

小隊が出る迄の間、他に飛び立った馬を見なかったか?」

巫女は即座に答えた。

「はい、小振りな馬が。でも反対方向だったので無関係かと?」

「どこへ飛んだか、見ていなかったか? どんな些細なヒント

でもいい?」

「……………」

巫女は額に指を当て、一生懸命思い出そうとした。

「飛んだ方向に…。オリオンの三つ星…。時間は、長様が発たれた数分後……」

「分かった! 有り難う!」

方向さえ分かれば何とかなる。確かにそちらには、常に落石

を起こしている岩山があった。後は「ネリ」の木を探せばいい。

行きかけるノスリに、巫女が声を掛けた。

「あの……」

「おう？」

「私は何かお役に立てる事はありますか？」

「ああ、いえ、貴方は早く帰って休ん……」

断りかけて、ふと思った。同じ女性として、フィフィにも、

この巫女殿の落ち着きと信念を見習って欲しい……という気がし

た。同じ位の年でこんなに落ち着いた少女を見たら、フィフィ

だってライバル心を燃やして、ちょっとは大人になってくれる

かも……。自分だってさっき、かなりの刺激を受けたのだ。

ノスリは巫女に向き直った。

「実は、里の女の子が一人、迷子になっている。捜しに行くの

を手伝って貰えるか？」

二頭、夜空を突いて岩山へ向かう。

谷あいには切り立った崖があり、いかにも岩が崩れそうだ。そ

の下に森があり、大きな木が沢山あったが、夜闇で種類が判別

出来ない。

「あ……馬が……」

地上に小柄な草の馬がふわふわ歩いている。たてがみのオシ  
ンジのボンボンルージュは、間違はなくフィフィの馬だ。

二人は地上に降りて迎りを見回した。

「崖の下へ行くこうと森に入ったのか？」

枝の張りの出しが多く、乗馬して入って行くのは困難な所だ。

ちよつと入ってみるつもりで、こういう所って迷いやすい。

「歩きか……。思ったより大変だ。申し訳ない」

「いえ、私は楽しんでますから。貴方こそ、大車輪で活躍され

た後なのに、お疲れでしょう」

この氣遣い……。フィフィに爪のアカでも飲ませてやりたい。

二人は大きな木の根元を辿り辿り、森の中を分け行った。

「その方……。家出でもしたのですか？」

「えっ……いや……」

「そう……すみません……。私がよく家出していた物ですから」

「へえ？ いや、あいつはそんな深い考えは持っていないよ。

単にツバク口を助けに行こうと飛び出したのが、ぜんぜん見当

違いの方向へ来ただけで」

「まあ……」

「まあ……」

「本当、短絡的な奴で……。後先考えない。好きな男が心配なの

は分かるが」

「…好き、なんですか？」

「そうだろう。ツバクロ見たら分かるだろう。里の女の子は大半がツバクロに憧れて、キャアキャア言ってる」

「……………」

「ああ、あなたはカワセミの方に魅力を感じるんだっけ？」

巫女はちよっと下を向いた。

「…ふふ、…ふふふ…！」

「な、何だ？」

「ああ、ごめんなさい、…今ね、私が着の里の女の子に生まれていたら…って想像しちゃいました」

「……………」

「そしたら私もやっぱりツバクロ殿にキャアキャア言ってる女の子になるわ」

「何？」

「楽だから、そして安全だから」

「…何だ、そりゃ？」

巫女はクスクス笑いを噛み締めながら続ける。

「女の子ってね、偽装するんです。手頃な、誰もが好きそつな見栄えの良いヒトをカモフラージュにして。ああ…、ツバクロ

殿は確かにそんな感じだわ。王子サマタイプで、人当たりも良そつ」

「……………」

いつの間にか巫女の方が先を歩いていた。歩き慣れた感じで枝や灌木を器用に避けている。

「女の子は男のヒトが思っているみたいに単純じゃない。遥かに複雑で…そして、擬態したいが上手いの」

「擬態？」

「そう、擬態して、男のヒトやライバルの女の子を油断させるの。皆で王子サマにキャアキャア言っている振りをして、水面下では凄く駆け引きが行われているんですよ」

「まさか…？ あんたみたいに賢い女性（ヒト）だけだろう？」

「さあ、どうでしょう？ 例えば、私だったら、王子サマにまごわり付く振りをして、その側に居る本命のヒトに近付くわ」

「……………」

「王子サマにちよっかい出して、そのヒトの反応を見るの」

「……………」

「王子サマに手作りのお菓子をあげて、ついでの振りして、ちよっかり本命の彼にも渡したり」

「……………!!」

巫女は森をどんどん歩いて行く。森の精気のせいかな、清廉潔白だと感じていた巫女殿が、だんだん妖女に見えて来た。

「あの…、巫女殿…?」

「はい?」

「その、擬態…って奴を、見破る手だてではないのか? えと…

…今の話だと、ツバクロがえらく可哀想だ」

「ふ、ふ…、簡単ですよ」

巫女は、木の幹を掴んでクルリと身体の向きを変え、ノスリに正面向いた。

「頭ごなしに、強い命令を下してみるんです。無茶な事じゃないけれど、その女の子には嫌な事。カモフラージュな娘(こ)は怒って離れて行きます。本気な娘は、それが出来るよう、一生懸命努力します」

「……………」

「ノスリ殿…?」

「あ…、ああ、すまない…」

ノスリはこの巫女殿がそろそろ怖ろしくなった。一瞬フィィとつるんでいるのかとさえ勘ぐった。ツバクロの安否も分からないあの状況下で、さすがにそれはないだろうが…。

「ノスリ殿」

「え? あ? 何だ…?」

「じゃあ、私が本当は誰が好きなのか、分かりますか?」

「ふえ?!」

困った…、そんな会話、男同士だった事ないぞ。

「ツ、ツバクロをカモフラージュにするんだろ? やっぱカワ

セミか? それとも長…?」

巫女は口の端に微笑みを称えて、ノスリをじっと見る。

「えっ? 俺? もしかして、俺?!」

「違います」

ノスリは脱力した。

「意地悪にも程があるぜ。純真な男心を弄んで楽しいかあ?!」

巫女は疲れを知らないように、森をかき分ける。

「ふ…ふふふ…、ごめんなさい。本当はね、分からないんです。

女の子ってね、擬態に擬態を重ねて…分からなくなっちゃうんです…自分で…」

藪を抜ける。大きな木の根元に出る。

「迷子になっちゃうんです……………」

トネリコの木の下に、歩き疲れて眠ってしまった、オレンジ毛糸のお団子娘がいた。



\*\*\*

「まったく、なんだって、あんな明後日(あさって)な場所に行つたんだよ」

救護所のツバクロのベッドの横で、ノスリは椅子にぶんぞり返って言った。

「だって…、落石が…って聞いて、真つ先にあの岩山が浮かんだんだもん。第一、朝そっち方向に飛んでったじゃない！」

タバ遅くなった上に両親にこつてり説教された娘は、それでも朝はぎつちり髪を二つ団子に結っていた。かいがいしくツバクロの世話を焼いているつもりだが、怪我人は落ち着けなくて困り顔だ。

「湖の巫女殿が見ていてくれなかったら、見つけようがなかったぞ」

「ぶん、あの人間の娘、じーっと里の外に立っていたっていうの?! ストーカーじゃない?!」

「フィフィ!」

ノスリは本気でひっぱたいてやろうかと思った。

トネリコの木の下のフィフィを揺り起こそうと近付くノスリの肩に手を掛け、では私はこれで…と、巫女殿は止める間もなく来た道を駆け戻って行った。

呆気に取られて、何も言えなかった。お礼すら…。さすがのノスリも何か察して、目を覚ましたフィフィには、巫女殿と一緒に捜索に来た事は言わなかった。

そうだ…、里の者達、…特に女の子達に、巫女殿の存在は受け入れ難い物なのだ。彼女はそういう気配を賢く察して、頑なに里に入らないし、昨日も一人、夜の森を駆け戻ったのだ…。

「長様は、里の女の子は弟子に取らないのに、何であの人間の娘だけ…」

「フィフィ、長は女の子でもやる気があれば弟子に取るよ。たまたま、やる気のある女の子がいらないだけじゃないか」

毎度毎度で辟易してゐるって感じのツバクロに、お団子娘は唇を尖らせた。

「やりたいって娘は一杯いるわよお!!」

「…口先だけじゃ駄目なんだよ…」

ツバクロは枕に頭を沈めて目を閉じた。この娘と喋っているのが悪化しそうだ…。

救護所の入り口が細く開いて、水色の大きな目だけ覗いた。

「カワセ!!!」

ツバクロは起き上がろうとした。

「ノスリィ…長が呼んでる……」

「ああ、分かった、すぐ行く」

「カワセミ、おい……」

カワセミはツバクロの呼び掛けに応えないで、さっといなくなってしまう。原因は分かっているのだが……。

「フィフィ…、そんな仁王立ちで睨んでいたら、カワセミでなくとも逃げ出すよ。僕に命の恩人に礼も言わせない気かい？」

「だって……」

「だってじゃない。アシは僕が悪くて、カワセミには何の罪もないって、何べん言ったら分かってくれるの?！」

「だって…だって、…生理的に、許せないんですけど！ あんなのが、ツバクロの側にいるなんて……!」

ヒステリーだ、手に負えない。

「じゃあ、俺、行くわ……」

立ち上がるノスリを、ツバクロは置き去りにされる仔犬のような目で見つめる。

入り口でノスリは振り向いた。あんまり気は進まないが、…ひとつ、試してみるか……。

「フィフィ」

「なに?」

「カワセミは俺とツバクロの大事な仲間だ。多分一生そうだ。

だから俺達といたいんなら、お前も受け入れなきゃ駄目だ」

「……?！」

フィフィは白目の部分を一杯にして驚いたが、ツバクロも驚いた。何を急に…?

「いきなり好きになれとは言わん。ただ、受け入れろ。あいつの良い所を捜して、そこだけ見てやれ」

「あいつの良い所…って?」

お団子娘は俯うつむいて聞いた。

「……………」

「……………」

ノスリもツバクロも固まった。え——と……………。

「……………分かった」

フィフィは俯いたまま、口を尖らせて小さい声で呟いた。

「……え?」

「……………努力する……良い所…探してみる……」

説き伏せた筈なのに、ノスリは頭の中で割れ鐘を叩かれたような顔をしている。

ツバクロは首を傾げて、傷口をさすった。カワセミには助けられるし、ノスリはなんだかノスリじゃないみたいな事を喋り

出す…。何だか色々動き出している。置いてけぼりにならないように、自分もとっとと怪我を治さなきゃ。

ノスリが長の執務室へ向かうと、今度はこっちでヒステリー  
の聲がした。

「入ってください」

やや困り気味な長の声。入り口をくぐると、案の定カワセミ  
が長椅子でフテくされて丸まっていた。

「珍しいな、どうした？」

ノスリはカワセミと長を見比べた。

「ヒドイんだよお、長が…」

「はあ…」

「ボクに、今日も休んでろって」

「ああ、いいじゃないか。俺も、お前はもう少し休めば良いと  
思った」

「湖の巫女に、今日は自分の用事を頼んだって言うの。ボクに  
断りもなく〜〜！」

「……………」

「巫女はボクが見つけたの！ 使う時はボクを通して！」

ノスリは長を見た。長も困り顔だ。

「カワセミ、巫女殿はモノじゃないぞ。お前の持ちモノじゃな  
いんだ」

「だって…」

カワセミは起き上がって二人を見た。水色の目は興奮してい  
るが、焦点は合っている。

「何処に居るか常に把握してなきゃ、危ない目に遭った時、気  
付いてやれないじゃないか！ 昨日のツバクロだって、ボクが  
もっと集中していれば早くに予知出来たんだ！」

長もノスリもハツとなった。

「お前…」

カワセミは昨日『たまたま』ツバクロの危機を感じたんじゃ  
なかった。自分より危ない任務をバラバラにやる仲間を…いつ  
からなんだろう？ 常に護る気で、アンテナを張り巡らしてい  
たんだ…。

長は、カワセミの頭に手を当てた。

「すみませんでした。貴方の気持ちも知らず…」

カワセミは今度は仔犬のような目になって長を見上げる。

「今後、巫女殿の行き先は、前もって貴方に伝えましょうね」

「はいー！」

カワセミはゲンキンに起き上がった。

ノスリはまだカワセミ見つけていた。これから能力が開く度に、こいつはその責を一人で負って行くんだらうか…？

「ノスリ？ …ノスリ？」

長の呼び掛けにやっと我に返った。

「は、はい…！」

「そついう訳で、今日のお仕事は貴方と私でこなしちゃいませう」

「あ、はい…！」

「えー？ 長も行っちゃつのお？」

「棘の森の猪殿は早い方が良いですからね。今日は執務室は貴方に明け渡しますよ。来客にはちゃんと対応して下さいね」

「びう～～～」

夕暮れ。

最後の仕事を終えたノスリは長と合流して、里へ向う所だ。

「ノスリ」

夕焼け空を背景に、長が話し掛ける。執務室以外でこうして話すのは久しぶりかもしれない。

「オタネお婆さんに聞きました。昨日の采配、実に見事だった

と」

大柄な青年は鼻の頭を赤くして俯いた。

「……俺……必死で……」

「嬉しいですね。みんなどんどん立派になって…。本当に貴方達を弟子して良かった…。本当に……」

長の横顔が夕焼けに溶けそつだ。このままいなくなりそつで怖くなった。

「長！俺達、まだ、長が必要です。カワセミなんか、特に！」

蒼の長はノスリをマジマジと眺めた。

「当たり前ですよ。カワセミのあの危うさ！ まだまだ放っておけません。貴方も、ツバクロも、教える事は山積みです」

「…はい！」

シャン、シャン、シャン…と規則正しい鈴の音が近付いて来た。湖の巫女殿が夕陽の中から速足で駆けて来る。長い黒髪がリスミカルに揺れる。

「やっぱり長様！ ノスリ殿、昨日は失礼しました」

「え、いえ、…こちらこそ……」

「丁度、ようございしました。受け取って来た品です」

巫女は鞍袋から包みを出して長に渡した。

「ご苦労様、あの子は元気でしたか？」

「はい、久々に裁縫の腕をふるえて楽しかった…と仰っていました。私もこの上衣のお礼を言う事が出来て、嬉しかったです」

「お茶でも飲んで行きませんか？」

「いえ、夕陽が綺麗なので散歩して帰りますわ。またご用の折はお声掛け下さい」

去りかける巫女に、黙っていたノスリが、思い切って声を掛けた。

「巫女殿！」

「はい？」

「デ、デートして下さいー！」

\*\*\*

馬繋ぎ場に一人で降り立った長に、カワセミが駆け寄った。

「お帰りなさい。ノスリは？」

「デートですって。湖の巫女殿と。帰りがけに行き合って」

「~~~~~!!! 聞いてないよ~~~~~!!!」

「今、言いましたよ。何か、相談事があるだけって言っていましたから、すぐに帰ると思いますよ」

長が話し終わる前に、カワセミは広場の向こうに敵を発見して、悲鳴を上げて逃げ出した。

「おやおや…」

長の横をお回子を振り乱したフィフィが駆け抜けて行った。  
「落ち着きのない子供達ですねえ…」

ツバクロがベッドで笑いながら説明する。

「朝方、ノスリがフィフィに説教くれたんです」

「ほお？」

「カワセミの良い所を見つけて、そこだけ見るようにしろって」

「ほおほお…」

「で、フィフィの奴、カワセミの頭に触って『フワフワで可愛いわね』って言おうと思って、一日中追っかけ回してた」

「…カワセミの良い所なんて、それ以外にも一杯あるのに！」

長は口を半分開けて、大真面目に呟いた。

「ところで、はい、これ、どうせ」

「これは…？」

ツバクロに渡された包みは、先程巫女が持って来た物だ。

「妹から、貴方の頼んでいた物です。たまたま貴方が怪我をした事を知って、では取りに来られないでしょう…という事で、巫女殿に運んで貰ったのです」

「すみません、私事なのに、お手数かけて」

包みを開くと、大陸産の見事なオレンジの絹衣装の一揃いが

出て来た。

「わあ……！ 反物だけでよかったのに……あの方が縫って下さったなんて、勿体ない……」

「好きでやっているんですよ。あの子も楽しかったって」

外で騒がしい物音がする。

「ちょっと触るだけってんじゃないのお〜」

「よ、奇るな……術が逃げるっ〜」

「……………」

「追い詰められたようですな……」

またバタバタとひとしきり騒ぎが起る。入り口が大きく開いて、片手にフィフィの首根っこを捕まえ、片手に身体中の毛を逆立てたカワセミを抱えたノスリが入って来た。

「だいたいま、こいつら、いつの間にか仲良くなったんだ？」

「仲良くなんかかってない！」

カワセミはノスリを振りほどいて、長の陰まで走って行って隠れた。

「何?! それ?! キレイー」

フィフィはツバクロの手元のオレンシの絹を目ざとく見止めた。

「ああ、これ、この間の、約束の」

お団子娘はノスリに放されて、よろけながら近付いた。

「え? なに? 私のなの?! えええっ? ホントにっ?!

うわああ〜!」

二つ団子の間の顔が、こぼれんばかりの笑顔になる。いつもこんな顔してりやいのに……とノスリは思った。

「ブタに真珠だ……」

小さい声で呟くカワセミの頭はツバクロが押さえて、夢のような絹を抱えてフィフィは躍りながら出て行った。

「女の子って簡単だなあ……」

「そう思うか? ツバクロ……」

カワセミがベッドの下から又ツと顔を出して、ノスリに迫った。

「巫女をデートに誘うんなら、ホクを通して〜!」

「おう、話しながら湖の畔まで送った。ほい、今言ったぞ」

「うっ〜」

「誰をデートに誘ったんですって?!」

御簾を開けて、着替えたフィフィが入って来た。みんなびっくりに目を見開いた。着る物ひとつでこんなに変わるなんて……。

「フィフィ、目茶苦茶似合ってる…」

ツバクロが目を丸くして、「金魚みたいだ…」と呟くカワセ  
ミの頭を押さえた。

「でも凄いわ、サイズも丈もピッタリ！ どうして？」

「ああ、寸法を聞かれて、だいたい同じくらいかなって、カワセミの寸法を測って教えたんですよ。ほら、以前も貴方の服を着ていたみたいだし…」

長がサクッと答えた。

「……………」

「……………」

「……………」

何となく地雷を踏んでしまったのに、長も危険を察知した。

「お尻も胸もペタンコだもんね！」

もうひとつの地雷の手を引いて、ではツバクロお大事に…と、

長はそそくさと御簾をくぐって、地雷原を退散した。

「アタアタアタシに…！ カワセミの寸法で服を仕立てたっ

てえっ?！」

ツバクロがベッドの隅に追い詰められる。昨日から受難続き

な男だ。

「フィフィ」

天の声彼女を止まらせた。

「むっちゃ似合ってるぞ」

その声は呪文のように、彼女の表情をフニヤリと柔らげた。  
さすがにツバクロも『気付いた』。

「さあ、もつ、しまっとけ。取っておきのとつときの時の為に。

今度はバカな従兄に見つけられない場所にな

「うん……………」

小鹿のようにしおらしくなった娘は、素直に自分の家に戻って行った。

ノスリとツバクロが残る。

「ノスリ……………あいつ…」

「……………困ってる……………」

二人、お団子娘の出で行った出口を見つめる。

「困ったから、巫女殿に相談したんだ」

「巫女ちゃんに? ……それで?」

「正しい女の子の振り方なんて、存在しないし、あっても教え

られません…だってさ」

「振るつもりなんだ…、まあ、気持ちに分かるけれど…」

「巫女殿は、女の子にハッキリ断らねばならないのは、他に好

きなヒトがいる時だけです！」って

「……そりゃまた……」

「後は、なるようになるものに任せておけばいいって。本当の手ではないのに気付くこと、向こうから離れて行くってな」

「ふうん…、まあ、フィフィは『恋に恋してる状態』だと思っよ。他の女の子達と同じようにね」

ノスリは目を丸くしてツバクロを見た。

「…お前、分かってたか…？」

「水面下で痛い目にも遭っているんだぜ、これでも…」

「何だよ、聞かせろよ」

「ノスリは何を巫女に相談したんだろ？」

執務室で書類の整頓を手伝いながら、カワセミは長に聞いた。

「まあね……」

長はすまして、重要な案件、そうでもない案件を選び分ける。

「巫女はボクらよりずっと子供だよ」

「そうですね。貴方といる時はどんな話をしているんです？」

「こないだは、海老料理のレシピ『百選』」

カワセミは未処理の書類から一枚引っ張り出して、長に差し出した。

「ふう…巫女殿の薄皮の外側を見ている者には、偉く頼りになるように見えるのですよ。おお、これは最優先だ。ご苦労さま、カワセミ」

「兄弟が多いから、みんなお兄ちゃんお姉ちゃん達の受け売りって言っていたよ」

「まあ……それは、言わなくて良いでしょう。そういう存在も必要なんですよ。年頃の男の子にはね」

「…ふうん…」

ツバクロが復帰した。

「暫く、二人一組制で試してみようと思うんです」

長は仕事の説明をしながら言った。

「二人分の仕事を二人がかりでは効率が悪く、時間が倍かかってしまいますが…」

「俺はそれでいいと思います。もうあんな思いは御免だ」

ノスリが言い、ツバクロも頷いた。

「ボクは巫女と一緒にだから、変わりないもんね！」

のほほんと言うカワセミを見て、ノスリが意地悪半分提案する。

「長、どうせなら公平に、巫女殿も入れて、四人でシャッフル

「しませんか？」

「だめええ〜!!」

カワセミは慌てて馬繋ぎ場に走り、巫女の馬を引っ掴んで飛んで行った。

「……はっっ！」

残された三人は呆然とした後、大笑いした。

「巫女殿は、自分の役立てる最適の位置でないと、我らの元には居ないと思いますよ。やはりカワセミの隣なんです」

「ああ、…冗談ですよ。でもちよっぴり残念だ…」

「後々は、今修行中の小さい弟子達と、貴方がたを組ませるようになりましょっ」

二人は責任感を噛み締めて頷く。

「女の子の弟子がいれば、ちよっとは楽しみもあるのになあ」

馬繋ぎ場へ歩く道々、ほやくノスリにツバクロも笑いながら

頷いた。

「でも、フィフィは御免だろ、…おっと、噂をすれば…」

馬繋ぎ場に、こちらに真っ正面を向いて、従妹殿が待ち構え

ている。

「や…やあ、フィフィ、おはようっ…」

「おはよう、ツバクロ、ノスリ。これからお仕事…だよな？」

「…っうん、そうだけれど…」

お団子娘はいきなり両手をツバクロの前に突き出した。片手に一つつつ、小鳥の卵位の石を持っている。片方は緑で片方は紫だ。それをツバクロの鼻先でカチカチと打ち鳴らした。

「…っ？」

「受難避けだって。こっちの緑が心の難、紫が物の難…、だったかな？ 逆かも shouldn't」

「…へ…え…？」

二人は石とフィフィを交互に見比べた。

「カワセミが、くれた。昨日…」

「へえ〜っ！」

二人は目を丸くした。

「進歩じゃないか！ いつの間にそんなに仲良くなったんだ？」  
フィフィは首を横に振る。

「これあげるから、もう、追っ掛け回さないで…っって」

「……………」

二人は追い詰められたネズミが猫に宝物を差し出す図を想像した。

「じゃ、フィフィ、俺には？」

「……」

「カチカチ、やってくねよ、…ついでに」

「うん…」

娘は大きな青年に、背伸びしてその鼻先で石を打つ。さっきよりハッキリした音が出た。

「じゃ、行って来るな」

「フィフィ、ちゃんと勉強しろよ」

二人の青年は、上空高く舞い上がる。娘は二人の影を見えなくなる迄見送ってから、自分の日常に戻った。

二人の消えた空は抜けるように青い。

もうじき秋の気配だ。

くおしまい

二〇〇九・九・某